

## 【研究課題】

### 静脈血栓塞栓症の疫学、病理学的検討

研究期間：2016年11月1日～2021年3月31日

静脈血栓塞栓症（下肢深部静脈血栓症・肺血栓塞栓症）は突然死の原因疾患のひとつである。血栓症のリスク因子には長期臥床（いわゆるエコノミークラス症候群）や入院・手術など複数あるが、近年癌患者における癌関連血栓症が注目されている。そこで行政解剖例における進行がんに伴う急性広範性肺血栓塞栓症剖検例の臨床病理学的特徴を検討した。

その結果、癌を伴う肺血栓塞栓症は中年女性が多く、肥満例は少なかった。原発部位は、結腸・肺・卵巣が多かった。約半数はがんの加療中であった。肺血栓塞栓症の性状は2/3が急性、1/3が再発性であった。静脈血栓の局在は9割が下肢深部静脈で、両肢性・下腿型が大半を占めた。他にがんに接する上下大静脈静脈血栓の例や、下肢深部静脈血栓と非深部静脈血栓の合併例がみられた。結果から、がん関連VTE予防においては非がん患者と同様の下肢の血流うっ滞防止が重要である一方で、がんの種類や部位・診療内容など、患者の個々の病態に即した対応が重要と考えられた。